

【シンポジウム『矛盾』を生きる?—古代ギリシャ、日本、インド— 提題】

「矛盾」なき生の意味すること — 弁論術、ソクラテス、プラトン —

野津 悌

拙稿は、2016年12月17日（土）に国土館大学世田谷キャンパス10号館10329教室に於いて開催された倫理学専攻シンポジウム『矛盾』を生きる?—古代ギリシャ、日本、インド—の提題として読み上げた原稿の全文である。

1 : 「矛盾した事態」と「矛盾した思考」

はじめに本日のわたくしのお話にてでくる「矛盾」という言葉の意味を明らかにしておきたいと思います。

日本語の「矛盾」は有名な中国の故事に由来します。それは、矛と盾を売る人が、一方で「この矛はどんな盾でも突き通す」と主張し、他方で「この盾はどんな矛によっても突き通すことができない」と主張した際、これを聞いた人から「その矛でその盾を突くとどうなるのだ」と問い詰められて、答えることができなかったというお話です。この話からわかるように「矛盾」とは一言でいえば「ありえないこと（不可能なこと）」です。

これと同様に、西洋語で「矛盾」に相当する概念を表わす *contradiction* や *Widerspruch* もまた、もともとは「ありえないこと」を意味します。西洋におけるそのような「矛盾」概念の古典的表現として、アリストテレス著『形而上学』における次の言葉が有名です。

同じ属性が、同時に、同じ事情のもとに、同じ事柄に属しかつ属さないことはありえない。（同書1005b19-20、出隆訳による）
例えば「黄色い」という同じ属性が、同じ時間に、同じ条件のもとで、

同じ実体に帰属しかつ帰属しないということはありません。それは「矛盾」であり「ありえないこと」です。以上のことから、洋の東西を問わず「矛盾」とは「ありえないこと」を意味する概念であることがわかります。

では「矛盾」が「ありえないこと」であるとしたら、「矛盾」は存在しえないものであることになるのでしょうか？もちろんそうではありません。「矛盾した事態」が存在することは確かにありえないことですが、人の心のなかに「矛盾した思考」が宿り、それが言葉となって現れることは当然ありえます。最初に述べた「矛と盾を売るひと」に起こっているのはまさにそのような事態です。

この事態は「ありえないこと」を「ありうること」であるとしている点で明らかな虚偽です。では何故そのような虚偽が生じるのでしょうか。ふたつの原因があるように思えます。ひとつは自分の心のうちに「矛盾」が生じていることに気づかずにそれを放置していること。すなわち無知です。もうひとつは自分の心のうちに「矛盾」が生じていることに気づきながらもそれを隠蔽して他人を欺こうとする意志。すなわち悪意です。このような無知や悪意は人間のあり方として好ましいものとはいえませんが、我々が人間であるかぎり根絶することが困難なものです。それゆえに、これらを原因として生じる「矛盾」は、古今東西を問わず、人間の世界に満ちています。では我々はこのような「矛盾」とどのように向き合っていくべきでしょうか。

古代ギリシャの人々は、このような「矛盾」をもつばら忌避すべきこととしてとらえました。「矛盾」を忌避しようとする態度は古代ギリシャのみならず古今東西における人間の世界において普遍的に見られる傾向ではありますが、古代ギリシャにおいてはその傾向がとりわけ顕著に表れているように思えます。本日はこの点について、古代ギリシャにおける弁論術、ソクラテス、プラトンを例にとりつつお話していきたくと思います。

2：弁論術と「矛盾」なき生

古代ギリシャにおける弁論術は、古代民主政と深い関連を持ちながら高度な発展を遂げた技術です。例えば紀元前5世紀のアテネにおいては、「国会」にあたる国家の最高意思決定機関は、成年男性市民全員が参加資格を持つ「民会」でした。また「裁判所」にあたる司法機関は、訴訟のたびごとに成年男性市民のうちから裁判員を選出する「民衆法廷」でした。裁判員数は裁判の種類に応じて様々でしたが、たとえば有名なソクラテス裁判においては501人であったことが知られています。弁論術は、このような「民会」や「法廷」といった市民の集会において、出席する市民たちに自らの主張の正しさを説得し、多数決を勝ち取ることを目的とする技術として発展します。紀元前5世紀のギリシャにおいてこのような技術を教える教科書が数多く存在したと伝えられています。

古代ギリシャの弁論術は、議会や法廷において自らの主張の説得力を強め論敵の主張の説得力を弱める効果をもつ様々な技法を考え出しました。そして、論敵が犯している「矛盾」もまたそのような技法の対象となりました。既に述べたように、人が「矛盾」したことを語る原因はその人の「無知」あるいは「悪意」です。弁論術はこの点を見逃しません。何故なら、法廷や議会において論敵の側に生じている様々な「矛盾」を指摘することは論敵の側の「無知」あるいは「悪意」を暴露することに他なりません。それらの悪徳が論敵の側にあることを示すことで、陪審員や議員たちが論敵に抱いていた信頼を破壊し、論争を有利に運ぶことができるというわけです。

この技法の具体的な姿を、古代ギリシャの弁論技術書『アレクサンドロス宛の弁論術』のうちに見ることができます。この書物はアリストテレス全集中の一書ですが、アリストテレスの真作ではなく偽作であるというのが定説です。ただ、偽作とはいえ、紀元前5世紀から4世紀にかけて発展した古代ギリシャ弁論術の数々の技法を伝える数少ない本でありその資料的価値は決して小さなものではありません。この本の著者は、論敵が「矛盾」に陥っていることを明らかにするための四つの手がかりをあげています。

第一の手がかりは「言論の主張している内容とは反対の仕方で行われ

たすべての行為」（同書1430a14-15）というものです。これは論敵において言論と行為が一致していないことを示すのに有効です。

第二の手がかりは「言論それ自体がそれ自身に反対しているすべての点」（同書1430a15-16）というものです。これは論敵の言論それ自体のなかにつじつまが合わない点があることを示すのに有効です。

第三の手がかりは「諸選択が、あるいは諸行為が、あるいは諸言論が相互に対立していること」（同書1427b12-14）というものです。（「選択」とは何らかの行為をなそうという決定ないし計画のことです。）これらのことが示しているのは、「選択」「行為」「言論」がそれぞれ場当たり的で一貫性を欠いているという事態です。それぞれについて次のように説明されています。

「選択」については「その人は自分が以前に行った選択に対立することを選択しはしなかったか、あるいは、たまたま好機が訪れようものならそのようなことを選択するのではないだろうか」（同書1427b25-27）。

「行為」については「ある人が過去において最初は誰かの友であったのに今度はその同じ人の敵となりその後ふたたび友となりはしなかったか」（同書1427b17-19）。

「言論」については、「いま何かを述べている人が以前に自分が述べたことに対立することを言っていないか、あるいは、その人がいま述べていることや前に述べたことに対立することを言いはしないだろうか」（同書1427b23-25）。

そして最後に第四の手がかりです。同書の著者はこれを、論敵の「行為」や「言論」が「正しいこと、法、有益なこと、立派なこと、容易なこと、もっともなこと、弁者の性格、ものごとの通常の成り行き」（同書1430 a26-30）に反対対立する様々な点、であるとしています。要するに、論敵の「行為」や「言論」が「正しいこと」や「法」といった社会一般の価値観と対立している様々な点、のことです。そのようなことを、論敵に側に生じている「矛盾」と呼ぶことにわれわれは若干の抵抗を感じるかもしれませんが。自分自身の価値観と世間一般の人々の価値観との間に食い違いがあってもそこには何ら「矛盾」はないとわれわれを感じるかもしれないからです。しかしよほど頑固な人間であれば別です

が、私たちが社会常識のある普通の人間であるとしたら、自分の言論や行為が世間一般の価値観と対立していることを指摘されたとき、動揺せずにはいられないことでしょう。そしてそれは自分の側に何らかの「矛盾」があることを認めることではないでしょうか。そのように考えるならば、この第四の手がかりによって暴露される不一致もまた「矛盾」であると見なすことができます。このような話は哲学を学んでいる皆さんには物足りない話かもしれませんが、少なくとも弁論術がターゲットとしているのは特殊な思想を持つ哲学者ではなく、社会常識のある平均的な人々であるということに注意しておかねばなりません。

このように弁論家は、自らの論敵が陥っている「矛盾」を暴露するために、上述の四つに分類された数多くの手がかりを用いることができます。『アレクサンドロス宛の弁論術』の著者は、それらの手がかりを一括して「思い当たること（エンテュメーマ）」と呼んでいます。これらの手がかりは、大抵の場合、すでに論敵自身の心の中や、弁論を聞いている人々の心の中にすでに潜在しており、誰かがそれを指摘するならば、すぐに「思い当たること」だからです。

同書の著者は、弁論術を学ぼうとする者に対して、論敵の「矛盾」を暴露するそのような「思い当たること」を弁論の随所で指摘せよと教えます。そしてその一方で、自分の側では、論敵からそのような攻撃を受けることがないように、日々の生活の中で「矛盾」した発言や行為がないように注意を払わなければならないと教えます。同書は次のように述べています。

もしあなたが、自分が同意を与えている事柄に常に留まり、生涯全体を通じて同じ友人を維持し続け、その他の生活態度も変えることなく常に同じ生活態度を貫いていることが明らかになるなら、あなた自身に関する事柄を（人々の）好意に満ちたものに仕立てることになるだろう。またあなたが、偉大であり立派であり多くの人々にとって有益でもあるような行為に取り組むならば、人々はあなたに注意を払うことになるだろう。（同書1445b40-46a4）

この教えは、弁論術を学ぼうとする読者に対して、何らか倫理的な生を送ることを奨励しているようにも見えます。しかし実はそうではありません

せん。弁論家にとって「矛盾」なき生を送ることは、人々からの信頼を維持することにより法廷や議会での論戦を有利に運ぶための単なる手段に過ぎません。弁論術における「矛盾」なき生の意味することはこれからお話しするソクラテスにおいてそれが意味することは全く別のものであることに注意しなければなりません。

3：ソクラテスにおける「魂」の調和

ソクラテスもまた「矛盾」の忌避を生涯にわたる使命とした人物です。前述の『アレクサンドロス宛の弁論術』はわれわれが「矛盾」と呼ぶ事態をいくつかに区別していましたが、ソクラテスが排除しようとしている「矛盾」はその分類のどこかにおさまるものではありません。弁論家にとっての「矛盾」は、論敵の「言論」「選択」「行為」における「矛盾」でした。これに対してソクラテスにとっての「矛盾」はそのような外面的な活動における「矛盾」ではありません。それはむしろ、それら外面的活動の根底をなす、内面的な（すなわち思想における）「矛盾」です。ある人が「言論」「選択」「行為」をなすとき、その人の「魂」のなかにそれらの原因となっている「思い」があるという意味です。

ソクラテスは何らかの「言論」「選択」「行為」の原因となっている「思いA」を持つ人間の「魂」の中にその「思いA」に「矛盾」する「思いB」がないかどうかを「吟味」し、実際に「矛盾」があればそれをその人に突きつけます。こうしてソクラテスは、自分自身についてであれ、他の人々についてであれ、そのような「矛盾」を発見し排除することを彼の生涯の使命としたのです。

ソクラテスにおける「矛盾」の忌避は、彼の倫理的生と密接に結びついています。一例をあげてみましょう。『ソクラテスの弁明』のなかで、ソクラテスは、アポロン神の命令によってアテナイの人々を吟味する活動（彼によればそれは「知を愛し求める」活動でもある）を行っている」と主張します。そしてそれ故に彼はたとえ殺されることになってもその活動をやめることはない」と断言します（同書29d）。これは、命の危

険をおかしてもミッションにしたがう兵士にも見られる勇気ある決断、その意味で倫理的決断です。このソクラテスの倫理的決断が彼の「矛盾」なき思考によって裏付けられていることを見落としてはなりません。

ソクラテスは言います。神の命令に従って人々を吟味する仕事をしているにもかかわらず死を恐れて持ち場を放棄することは、死ぬこと以上にいっそう大きな悪であり醜である、と。このソクラテスの主張は、次のような「矛盾」なき思考に基づいています。

(A)「あの世のことについては、よくは知らないから、そのとおりにまた、知らないと思っている」。一方で

(B)「不正をなすということ、神でも、人でも、自分よりすぐれている者があるのに、このすぐれたものに服従しないということが、為にならぬ悪であり、醜であるということは、知っている」。それゆえに

(C)「悪だと知っている、これらの悪しきものよりも、ひょっとしたら、善いものかもしれないもののほうを、まず恐れたり、避けたりするようなことは、決してしない」。

しかしわれわれはこのソクラテスの論証を受け入れることができないかもしれません。何故でしょうか。それは我々が自らの「魂」のうちに「死」というものが害悪の最大のもの」であるという「思い」を抱いているからです。しかしこのような「思い」を抱く我々に対してソクラテスは「あなた方はあの世のことを知っているのか」と問うことでしょう。すると我々は「知らない」と答えるでしょう。ところがそのとき、我々の「魂」が「矛盾」を抱いていることが明るみに出されます。何故なら、我々の「魂」のうちに「死は悪である」という「思いA」と「死が善であるか悪であるかを知らない」という（「思いA」とは相容れない）「思いB」とが共に存在していることに気づかされることになるからです。そしてソクラテスは我々がそのような明らかな「矛盾」を「魂」のうちに放置していることを厳しく批判するのです。

死を恐れるということは、いいですか、諸君、知恵がないのに、あると思っていることにほかならないのです。なぜなら、それは知らないことを、知っていると思うことだからです。なぜなら、死を知

っている者はだれもいないからです。ひょっとすると、それはまた人間にとって、いっさいの善いもののうちの最大のものかもしれないのです。それを、害悪の最大のものであるのは、もう知れたことのように、恐れているのです。そしてこれこそ、どうみても、知らないのに知っていると思う、かの不面目な無知というものに、ほかならないのではないのでしょうか。（同書29AB 田中美知太郎訳）

なお先ほどの例の中でソクラテスが、「自分よりすぐれている者に服従しないこと」に関して、それが悪であり醜である、と断言している点を見落としてはなりません。ソクラテスは「無知の知」の重要性を唱えた人として有名ですが、すべての事柄について「無知の知」の必要を唱えているわけではありません。ソクラテスは断言すべきときには断言します。理性的思考は、自らが十分に納得できると考える諸原則を出発点としなければ始まらないからです。そのような諸原則を出発点として設定し、それらの原則と「矛盾」しない思考を展開することによって自らの行動を律していこうとするのがソクラテスの基本的な態度なのです。

ソクラテスのそのような態度はプラトン著『クリトン』の中によく現れています。同書の中でソクラテスを牢獄に訪ねた親友クリトンはソクラテスに脱獄するよう懸命に説得します。しかしソクラテスは脱獄することに同意しません。ソクラテスはクリトンに向かって言います。自分は「自分でよく考えてみて、結論として、これが最上だということが明らかになったものでなければ、ぼくのうちの他のいかなるものにも従わないような人間」（45B）であると。そしてそのような「結論」としての原則のひとつが「大切にしなければならないのは、ただ生きるということではなくて、よく生きるということである」（48B）というものだというのです。またその上でソクラテスはこの「よく生きる」は「正しく生きる」と同義であることを確認します。そして彼はそのような自らの生き方の原則と「矛盾」しないのは「脱獄も国外逃亡もせずに刑に服すること」であるということを示すのです。

このようなソクラテスの生き方は単純明快です。彼にとっての倫理的生は、自己の「魂」から「矛盾」を追放し、「矛盾」なき「魂」が命ずる通りの行為を遂行することに他なりません。そこには自己矛盾もなけ

れば言行の不一致もありません。このようなソクラテスの生き方はプラトン著『ゴルギアス』の中でソクラテスが発する次の言葉の中に印象的に現れています。

ぼくのリュラ琴の調子が合わないで不協和な音をだすとか、ぼくが費用を負担することになる合唱隊がそのありさまであるとか、また、世の大多数の人たちがぼくに同意しないで反対するとしても、そのほうがまだしも、ぼくが一人であるのに、ぼくがぼく自身と不調和であったり、自分に矛盾したことをいうよりも、ましなのだよね。

(482B、加来彰俊訳)

プラトンが対話篇の中で描くソクラテス像を信じるならば、ソクラテスはこのような自己矛盾の排除を自分自身のみならず他のアテナイ市民にも求めました。それが問答による「魂」の吟味という活動となり、その活動により吟味された人々の怒りがソクラテスに死刑をもたらすことになるのです。

4：プラトンにおける「魂」の調和

もっともソクラテスの倫理的生は常人には近づくことができない厳しさを持っています。たとえソクラテスのように「矛盾」なき思考によって為すべき行為を見出したとしても我々はその行為を実行に移すことができるでしょうか？ある行為をなすべきであると理屈の上ではわかっている、心の弱さから、あるいは欲望に負けて、その行為をなすことができない、という事態の存在を我々は否定できません。その意味でソクラテスのような生き方は容易ではありません。ソクラテスの弟子であるプラトンはその問題に既に気づいていました。

プラトンは彼の初期の終わりごろに書いた『プロタゴラス』の中で、ソクラテスにある奇妙な主張をさせています。ソクラテスは「ある行為が善いと知りつつ快樂に負けて別の行為をすること」はありえないと言うのです(同書352DE)。ソクラテスによれば、「ある行為が善い」という「知」が本当に存在するとしたらその「知」は必ず人間の行為をその

方向に導くとされます。また仮にその行為がなされないとしたならば、それはその「知」がなかったということを意味するというのです。ソクラテスにそのような主張をさせているのは対話篇の著者であるプラトンです。しかしプラトンはソクラテスのその主張をそのまま受け入れているわけではありませんでした。

プラトンはその後、彼の中期の代表作である『国家』（第2巻）の中でソクラテスの「魂」についての考え方に大きな修正を加えます。これまでお話してきたソクラテスの考え方によれば、人間の「魂」は「理性」そのものでした。すなわち「理性」が下した判断に反抗する原理は「魂」のなかには存在しません。それゆえに「魂」が「善い」と思ったことは必然的に行為に現れると考えることになるのです。これに対してプラトンは、人間の「魂」をいっそう複雑なものであると考えました。プラトンによれば、「魂」は「理性」「気概」「欲望」という三つの部分から出来ているというのです。「理性」は真偽や善悪を判断する部分です。「気概」というのは、怒りや恥のような感情をもたらす部分です。「理性」による制御を受け入れることができることがこの部分の特徴です（例：怒っている人が事情を理解することで怒りをおさめる、等）。そして「欲望」というのは、食欲や性欲のような欲求を生み出す部分です。そして「気概」とは異なり「理性」による制御を受け入れず、これを押さえつけるためには「気概」による制御に頼らざるを得ないということが、この部分の特徴です（例：恥ずかしいので欲望を我慢する、等）。

さて人間の「魂」がこのような三部分から構成されているのだとしたら、「理性」が命じることにその他の部分が反抗するという事態を容易に想像することができます（例：腹八分が善いと知りつつ食べ過ぎてしまう、等々）。このようにしてプラトンは「ある行為が善いと知りつつ快楽に負けて別の行為をする」という、人間の魂に生じる「矛盾」した事態を説明することに成功しました。プラトンは、一人の人間をいわば複数化することにより、心理的葛藤の内実を哲学的に説明したという言い方もできるでしょう。

もっともプラトンは、人間の「魂」に生じるそのような「矛盾」を放置してよいと考えてはいません。プラトンもまたそのような「矛盾」の

忌避を彼の哲学の課題としました。

プラトンは人間の「魂」をひとつの国家に喩えます。国家には「支配者」がいて命令を下します、「兵士」はその命令に従い、圧倒的多数の「生産者」を制圧します。そのような秩序が存在していることが国家における理想状態であるとプラトンは言います。プラトンによれば、同じことが個人の「魂」においても当てはまるとされます。個人の「魂」においても、「理性」が命令を下し、「気概」がその命令に従い、最大の構成要素である「欲望」を制圧するという秩序を考えることができ、そのような秩序の存在が「魂」における理想状態であるということです。

プラトンは、そのような「魂」の理想状態を実現するための教育が必要であると考えました。彼はそのために、「理性」を対象とした教育だけではなく「気概」を対象とした教育の必要性を強調します。前者はいわゆる哲学ですが、後者はそうではありません。「気概」を対象とする教育というのは、幼少期から始まる感情・快楽の陶冶です。そのような教育の詳細を、プラトンは『国家』第2-4巻で詳しく論じています。その教育とは、幼少期から始まる文芸と体育を通じての教育のことであり、いわゆる「哲人王」の教育プログラムの中の最も初期段階のものに当たります。そのような教育を通じて、少年たちは、正しく恐れること、正しく恥じることを知ることになり、秩序ある「魂」を実現する道を歩みはじめる。そのようにプラトンは考えたのです。

このようなプラトンの哲学は、「理性」そのものにおける「矛盾」の忌避というソクラテスの取り組みに加えて、「理性」「気概」「欲望」という三者間における「矛盾」の忌避という新しい倫理的課題を設定するものでした。プラトンが設定したこの倫理的課題は、彼の弟子アリストテレスに継承され、『ニコマコス倫理学』における中心的課題となるのです。

5：おわりに

本日のお話の中で、古代ギリシャ弁論術、ソクラテス、プラトンのそ

れぞれにおいて、「矛盾」なき生が意味するものを明らかにしてみました。弁論術にとって「矛盾」なき生を送ることの意味は、何よりも、共同体内での信頼の獲得にあります。ソクラテスにとっての「矛盾」なき生は、一個の理性的存在として首尾一貫した倫理的な生そのものです。そしてプラトンにおける「矛盾」なき生は、理性と感情と欲求を備えた人間の円熟し調和のとれた生き方を意味することになります。

このように「矛盾」に対する向き合いかたはそれぞれ異なりますが、「矛盾」を何とかして忌避しようとする態度は三者の共通点です。そこには、人間を本質的に「矛盾」した存在として受け入れようとする態度、「矛盾」を何らかの発展の契機として肯定的に受け入れるようとする態度、は稀薄です。このような単純明快な理性主義は古代ギリシャ思想の魅力のひとつだと思いますが、評価の分かれるところかもしれません。